

山の陰動かす小田の蛙かな
梅か香や机の塵の眼にさはる
腰のすや朝顔蒔て遠詠め
垣こしの梅はひらくに美わさ哉

燕 栄
祇 年
冬 松
素 席

遠のいて殊勝に聞や雉子の声
釈教の部にも入たし木蓮花
なかる、や何処の門にも春の水
一人行て見れば友あり花の中
手向はや念入れて折花の枝
日を経ても其香忘す梅の花
見尽くした嘶はきかすちる桜
余所眼にも根つよき色やさし柳

青 森
酢 泉
甫 貞
始 考
龜 年
飴 仁
秋 勇
童 妓
同

亡父の三年忌に
香を捻て

春さむし大切な日を鐘かなる
霞にも雨にも三とせ思はる、

甫 山
甫 川

七とせ以前にや仮初に面を
合せて交りを結し外か浜
青森の甫赤老みまかり給ふて
ことし大祥忌といへる消息に
薫沐して
翅あらは行て手向ん奥の花

等 栽

丑のとし

鷗波書 印